

■ エネルギー転換 ■

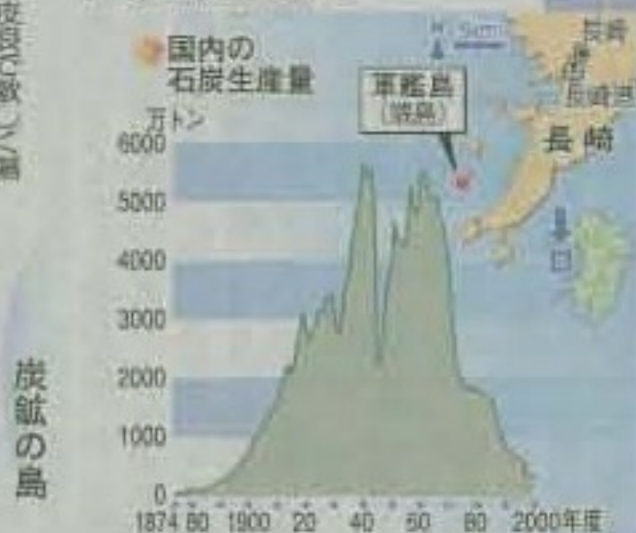
歩み来て、未来へ

ニッポン近代考

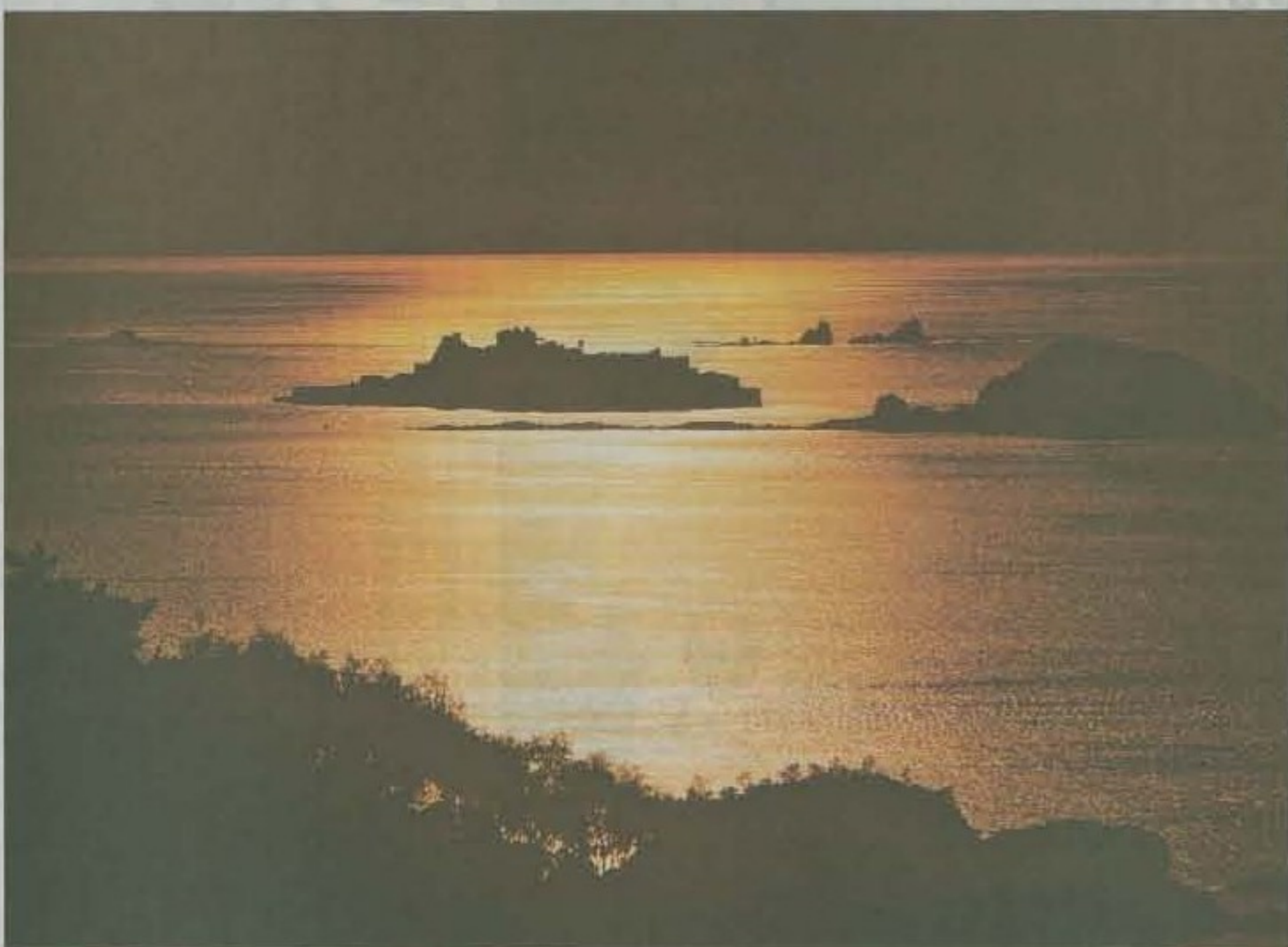
ヘリコプターは長崎港を過ぎ神合を進む。目的地のその島は際立って異質だった。自然にはあり得ない直線的で灰色一色の島影。岸壁に囲まれ、海上要塞のようだ。近づくとビル群が見える。窓は破れ、廃墟と化している。人の気配はない。

無人の岩礁にすぎなかった島は江戸時代に石炭が見つかると、明治以来、皮紙で栄えてきた。島には延べ五十棟以上のアパートが建てられ、最盛期の一九六〇年ごろ、人口は五十人以上に、人口密度は東京の九倍強に及んだが、約三十年前、無人島となった。風化を待つのみだった島は産業遺構として注目され、二〇〇八年九州・山口の近代

化産業遺産群の一として、世界遺産候補に。長崎市の整備に乗り出している。島は台風や波浪で激しく偏見ながらも、その威容で近代の歴史を伝える。元島民らが営利活動法人(NPO法人)「軍艦島を世界遺産にする会」



軍艦島は生きています



記事は「日本の未来図?」との見出しで島の人口密度、海底水道の長さや世界一と紹介。「この端島(軍艦島)の風景は何世紀か先の未来図かもしれない」と記す。軍艦島は石炭を基幹産業とした近代日本の先端だった。長崎港に近いため西洋技術導入で先駆け、国内でも早い一八七〇(明治三)年、炭鉱開採に着手、九〇年、三菱財閥が本格採炭を始めた。高火力の良質炭は主に国内初の近代製鉄所である八幡製鉄所に供給され、同じく基幹産業の鉄鋼を支えた。本太市(元邑)は高校まで島で育った。父が営む真壁には若い鉱員が集まり、活気にあふれた。「炭鉱は給料がいいし、家賃と光熱費はタダ同然。給料が入ると長崎の街に乗り出し「ごんちゃん」騒ぎした」。一九六〇年代、石油へのエネルギー転換が始まると、炭鉱しかない島はあっけなく結末を迎えた。七四年、閉山。住民はわずか三カ月で残らず島を離れた。みな再就職先探しに必死だった。引っ越し準備の時間もなく、生活用品を残したまま去る家族も多かった。本本の両親は長男を頼り、神奈川・小田原へ。本本が長崎で営むし店からは島民の姿が消えた。「家族のために夕暮に浮かび上がる島影は、端島「軍艦島」と書つにふさわしいシルエットだ(撮影・有吉叔裕)

消えた数千人の住民

黒いダイヤ 15770万ト。わずから、島の軍艦島が閉山まで採掘した石炭の総量だ。海底炭鉱の最深部は海面下1000メートルを超え、気温30度、湿度80%という過酷な環境も、島民が命がけで掘り出す。黒いダイヤが八幡製鉄所の操業を、ひいては日本の工業化を支えた。取材ノット

仲が良かった住民は全国散り散りに。慣れない土地、仕事で苦労したようだ。坂本は「石炭はまだあるのに採掘が取れないから島ごと捨てる」と言う。戦時中、中国人や朝鮮人が島に徴用された事実も残る。盛衰は近代の明暗をも映し出す。異彩放つ 二〇〇八年十一月、長崎市が報道陣に軍艦島を公開した。建物老朽化で危険なため上陸禁止だが、市が見学路の工事を進め、今春以降の一般公開を予定する。記憶残す 井上博登さんと木村至聖さんは、軍艦島を研究する早大と京大の大学院生だ。井上は探検部時代に訪れたことから、島民の生活を調べ始めた。「こんなすこい所に住んだのか。炭鉱という巨大な産業が現れ消えた影響を解き明かしたい」。木村は書店で見た廃墟の特集に興味を覚え、産業遺産の研究を始めた。「軍艦島を見たら若い世代も衝撃を受けるはず。その驚きが何かを考えることが、自分たちが生きるこの時代を考えるきっかけになると思う」。坂本は島の紹介や資料としての保存のため、注目を再現する映像を制作中だ。「物は必ず風化するけど記憶は残る。その意味で島はまた生きています。島が甦るメッセージを未来に残したい」と語っている。

